

## 対談「相談現場から見える女性の貧困、仕事、住まい」 ——2021年度日本フェミニスト経済学会大会共通論題「コロナ災害があらわにした女性のいのちとくらしの課題」トークセッション記録

語り手：雨宮処凜（作家・活動家）

聞き手：伊田久美子（大阪府立大学名誉教授）

伊田：長年貧困問題に現場で取り組んでこられ、闊達に活動に取り組んでおられる雨宮処凜さんをお迎えすることができ、今日は大変うれしく思っております。取材と支援活動で、個々の人々に、向き合っただけでこられた活動に心から敬意を表します。雨宮さんが強く発信しておられる生き抜く方法は、今困っている人たちにただちに役立つものであり、これから困難に直面する可能性は誰にでもあるのですから、誰にも必要になる情報だと思えます。

フェミニスト経済学は、従来の経済学が無視・軽視してきた人間の生活を直接支えている家事、育児、地域活動などお金にならない労働やケアなどの低賃金の不安定労働に着目し、経済学のあり方を批判する研究分野です。今回共通論題でコロナ災害を取り上げるにあたり、自助がもはや行き詰っている中で、本来機能すべき「公助」、つまり政策がまるで機能していない、そういう中で否応なく隙間を埋める「共助」の現場で活動しておられる雨宮さんに、今日お話を伺いたいと思い、ご登壇をお願いした次第です。

わたしは雨宮さんとは2013年に堺市で開催された、フェミニストカウンセリング学会のシンポジウムで一緒させていただきました。その時の話で、困難に直面した人たちが助けを求めないという問題をお話になられて、人に相談に行くことや人に助けを求めることができる要件をお話しになりましたね。自己肯定感を奪われた人たちは、相談どころか問い合わせもできないということ、「『助けて』と言えるには、ある程度の前提を満たしていないとそれは無理だ」というご指摘に「なるほど」と思いました。それは女性の貧困の見えにくさの要因の一つであるのではないかと思います。

今回のコロナ禍は、リーマンショックの頃とやはり違いがあり、その一つに相談などに来る女性が目立って増えたということが言われています。このことは、雨宮さんがご近著の『コロナ禍、貧困の記録』の中にも書いておられます。そんな中、今年に入って実施された「女性による女性のための相談会」の取組み、女性対象のオンライン相談会など、

女性に向けた活動が今回はかなり展開していて、雨宮さんも尽力しておられます。そこで改めて相談支援の現場からみえる女性の状況、また女性を含めて広く全般的状況をお伺いしたいと思った次第です。

まずは改めて、貧困問題に取り組む活動に入られた経緯も含めて、雨宮さんに簡単に自己紹介をお願いします。よろしくお願いいたします。

雨宮：はい、よろしくお願いいたします。雨宮処凛です。私は2006年から、貧困問題をテーマとして、15年間活動してるんですけども、もともときっかけは自分自身が19才から24才までフリーターだったこと、その当時就職氷河期世代と言われ、今になって「ロストジェネレーション」と名付けられていますけれども、バブル崩壊後の氷河期によって就職できない同世代の人たちが大量に生み出されたことでした。

この問題は90年代から10年以上にわたり、自己責任という形で語られ、労働問題というよりは「勝手な若者が就職する気がないんだ」という問題であると、ずっと言われてきました。その中で心を病んだりとか自殺したりという人たちがすごく多かったです。自分の周りにも多かったですし、自分自身もそういう中でリストカットをしたり、自殺願望をもったりしたので、そういう問題がこれは個人の心の問題ではなく、構造の問題であり、新自由主義の問題だということを、2006年にある講演で知って、それからずっと自分ごととして取材をしている形です。

伊田：ありがとうございます。それでは今回のコロナ災害での貧困、支援の現場の実態について、お話しただけたらと思います。

雨宮：ある意味、15年間貧困問題に取り組んできて、この1年半が15年分を凝縮してもまだ足りないくらいの、ものすごい深刻な状態なんです。

まず今年の3月に、私、「反貧困ネットワーク」という団体の世話人なんですけれども、反貧困ネットワークが呼びかけて、40くらいの貧困問題に取り組む団体と一緒に、「新型コロナウイルス緊急アクション」というアクションを立ち上げました。緊急にコロナでの失業問題とか貧困の問題に対処するネットワークを作ろうということで、4月にメールフォームを立ち上げたんですね。去年の4月から今日に至るまで、連日SOSのメールが届き続けています。その内容は、「所持金がゼロ円」だとか、「ホームレス状態になってしまった」、「そういう状態で何日も食べていない」というものです。また家を失って車で生活しているという車上生活の相談、「自殺するつもりで荷物を全部捨てたけど、メールしま

対談「相談現場から見える女性の貧困、仕事、住まい」

した」という声もあります。そういうメールが700件以上届いていて、それに支援者らが駆け付けて、家がない場合は緊急の宿泊費を渡して、とりあえずその日はホテルに泊まってもらって、いろいろ聞き取りをして、だいたい後日生活保護申請になるという形で、700件以上に対応しています。

年齢層は20代から40代ですね。女性も2、3割います。メール相談以外の、他の支援団体からの相談を含めるとこれまで2,000件以上に対応していて、ホテル代とか食事で給付したお金は6,000万以上になるんですね。全部寄付金でまかなっているという状態です。

伊田：やはりこの1年半が、それ以前に比べたら、質的にも量的にも、大変深刻な状態だということが分かりました。例えば、リーマンショックの時とはどんな違いがあるか、お話しただいてもよいでしょうか。

雨宮：2008年から2009年、リーマンショックがあった年の年末年始に、年末から6日間「年越し派遣村」が日比谷公園で開催されました。そこに職を失って所持金もなく住まいもない人たちが505人来て、一緒にテントで年を越すということがありました。その当時、(相談者が)505人来たうち女性が5人だったんですね。1%だったんです。

それに対して、去年の年末から今年の年明けにかけて、3日間「コロナ被害相談村」が東京の大久保公園で開催され、テントを建てて相談を受けました。ここには3日間で344人の人が来て、うち女性が62人でした。なので18%にあたる約2割弱が女性でした。その62人の女性のうちの、29%がすでに「住まいがない」、42%が「収入がゼロである」、21%が「所持金が1,000円以下」でした。これは所持金の額という人もいれば、貯金の残高を合わせても全財産が1,000円以下という人たちも結構いました。

たった62人を見ても、その3割が、家がないのです。これはものすごい範囲で女性のホームレス化が起きているんじゃないかということになり、今年の3月と7月に、女性による女性のための相談会を開いたんですけれども、どちらも120件以上相談がありました。やはり住まいがない女性も何人かおられて、そのまま生活保護申請になりました。

私は15年間、この貧困問題に取り組んできて、コロナ以前では、失業のみを理由としてホームレス化した女性には会ったことがなかったんですね。コロナ以前に会ったのは、DVや親の虐待で逃げてきている、自分が何らかの依存症や精神疾患をかかえていて、それによって住居がない、それで住民票がないから仕事ができないという形で、失業の前いろんな問題があってホームレス化しているというのが、女性のホームレス状態の人

たちの問題だったんです。今回初めて、他に問題はないのに失業だけで路上に出てしまった女性に出会いました。それは本当に、職場で寮生活をして働いている方もいますし、「コロナで仕事がないよ、仕事もクビだから寮も出て」と言われて、即日あるいは1週間以内にすぐ出されるというような状況もありました。

去年の春ごろで多かったのはシェアハウスからの追い出しですね。シェアハウスって20代の女性が一番多く住んでいるらしいんですけども、年収200万以下の女性たちが多くいんですね。シェアハウスって、もちろんいいところもあるんですけど、結構脱法的なところもあり、規制がゆるいので、賃貸借契約みたいに、3か月の滞納がなくても1か月の滞納で追い出せちゃうところもあるんですね。契約書に細かくいろんなことが書いてあって、2年以内に退去するんだったら、出ていくときに10万円払えとか。お金がなくて家賃払えないから出ていくのに、その時に10万円を請求される。

またいろんなコンセプトやテーマがあるようなシェアハウスがあり、例えば「ダイエット」というテーマが設けられ、みんなでダイエットを頑張りましょうというシェアハウスもあるんですね。そういうところは体脂肪率と家賃が連動していて、太ったら家賃が上がって、痩せたら家賃が安くなるというような仕組みもあったりします。そういう謎の仕組みがあったりして、結構肖像権に関わる書類も書かされてしまって。最初にインタビューを受けて、ダイエットが成功したら、ここできれいになりましたということだと思うんですけども、そのインタビューを受けると初期費用が安くなったりするんですね。またシェアハウスの住所は分かるわけですけど、そこに顔だしの写真が載っているということは、セキュリティ的にすごく危険じゃないかと思う。

このようないろいろな、ある意味で「創意工夫」がなされているシェアハウスもあり、脱法的なことがある。たちまち家賃が1か月払えないだけで追い出されてしまって、女性はそのままホームレス化するということもある。本当に初めて失業のみを理由としてホームレス化した、しかも若い女性に、会いました。

リーマンショックの時には風俗やキャバクラの女性は全然相談に来なかったというか、これまでの15年間で風俗キャバクラの女性の相談を受けたことはほとんどなかったんですね。労働相談はたまにあったんですけど、それでホームレスになったというケースは、私はなかったんです。でもこの1年半ではかなりの方が相談に来ました。例えばキャバクラの方は店が休業になってしまったとか、風俗店の方は去年の2、3月から全然お客さんが来ない。お客さんが来ないなかで、寮費だけは取られる。寮に住んでいる方が多いのですが、その寮費も本当に不当に高く、普通のアパートにちょっと上乗せされているような状態で高いので、他のアルバイトをして、その寮費を払っている。それでも払

えないから、今週中には追い出されてしまうという相談も結構ありました。

何人かあったのは、これが初めてのホームレス化に直面したことではないということでした。風俗店で働いていた女性の方は、東日本大震災の時にも、被災地ではなかったけれども、やっぱりお客さんが全然来なくなったらしくて。当時、荷物が部屋にあるまま、鍵を変えられてそのまま荷物も寮も失ってるんですね。その経験があるから、今回また荷物を失いたくないということで相談に来られてるんですね。3.11（東日本大震災）でも同じような目にあっていた。

あと、これは男性ですけど、去年の炊き出しに来た男性は、今回コロナで「ホームレスになったんです」と来たんですが、よくよく話を聞くと2008年の派遣村にも来ていたという方でした。結局派遣村でみんな生活保護を申請したんですけれども、同じように短期の派遣労働しか就けないんですね。それで10何年たって、こういう感染症の流行による経済危機で、同じような目にあっている。リーマンショック、3.11、コロナで、何かある度に生活が根こそぎ破壊される人たちが一定数いるということを経験して身染みて感じた。なので、本人たちもあきらめているんですね。「何かあったら自分たちは全部失うんですね」と。3回目なんですよ、リーマンショック、3.11、コロナ。同じような派遣だったり非正規だったり、不安定雇用の人たちがそのたびにひどい目にあっているということが見えてきた感じですね。

伊田：ありがとうございます。なかなか知られていないことをたくさん伺いました。冒頭にも述べたように、以前に比べると女性たちが可視化されてきたと思うんですが、今回飲食や宿泊業など女性の多い職業でかなりダメージが出ているうえに、今回政府の政策が差別的ですよ。夜の町、パチンコ、飲食というように、大した根拠もなく、標的を作って弾圧するような、そういう対応を繰り返している。典型的には、学校休業と対応支援金の、風俗営業と関係者の除外という問題がありました。また今回女性の自殺の増加も注目されています。特別給付金といえば、粗悪なマスク2枚を除いて、日本政府が唯一実施した普遍的給付ですが、受給資格者を世帯主に限定しました。相変わらず家父長制が多くの女性を落胆させていると思います。相談支援の場からみえる女性の状況から、根本的な課題を見せつけられる思いがいたします。加えて、今回反貧困の活動に、犬猫部を設けて、寄付を募っておられました。人間の生活にとって、一緒に暮らす人間以外の動物は、余裕のない中で無視されがちですが、むしろそういう時こそ人間の範囲を超えた共存が重要であると思わずにいられないです。



雨宮：はい、去年の6月に、反貧困犬猫部というのを立ち上げたんですね。コロナ禍が始まってまだ初期の頃でしたけれども、ある女性からSOSメールが来て、犬と一緒にアパートを追い出されてしまい所持金が150円しかなくて、昨日から自分も犬も食べてないという内容が、緊急アクションの方に届きました。まず支援者が、瀬戸大作さんという反貧困ネットの事務局長の方で、犬を飼っているので、自分の犬のペットフードを持って駆け付けたんです。普通だったら、住まいのない人がSOSをくれた場合、その日はとにかくホテルに泊まってもらうようにします。でもそこでハタと気づいたのが、犬がいるとホテルに泊まれないし、ネットカフェにも泊まれない。公的な施設もありますよね、例えば、あまりおすすめはしませんが、婦人保護施設とか公的に入れる場所もあるんですけど、そこも犬がいると入れないという状況です。つまりペットがいることによって、あらゆる支援から漏れてしまうということが発覚したんです。これはたぶんこの後もっと増えてくるんじゃないかという話になって、とりあえずいろいろ探すと、都内に何軒かペットと泊まれるホテルってあるんですね。普通のホテルより高いので、支援の宿泊費の上限は超えちゃうんですけど、とにかく緊急なので、そこに何泊かしていただいて、その間に民間のシェルターを探して、そこに移動してもらったことがありました。移動した途端に、犬が18才の高齢だったので、ものすごい体調を崩してしまって、連日病院通いが始まりました。動物の医療費って高いんですよね、人間と違って保険がきかないので。どんどんお金がかさんでいく中で、それまで人間の寄付金でやってたんですけど、おそらく犬猫に使うなんてぜいたくだという人がいるかもしれないので、別枠で犬猫部というのを立ち上げようということで寄付金を募集して。そこから治療費とかいろいろ出したんですけども。そのうちに他の案件でも、犬や猫を連れてくるという人がどんどん現れるようになりました。

最初の犬を連れてきた女性もそうなんですけれども、私たちのところに来る前に役所に行ってるんですね。役所に行ってるんですけど、役所の人に「生活保護受けたいんだったら犬を処分しろ」と言われてるんですね。他の人も、何人かに聞いたらやはり同じこと言われてるんですよ。「処分しろ」って言われてるんですよ。「処分しろ」って殺せってことじゃないですか。私も猫を飼ってるんですけども、猫は家族なので、殺せってことはありえないわけですよね。それは法的にも間違っている対応で、生活保護法にはペットを飼っちゃいけないなんて一言も書いていないし、厚労省とかいろんなところで確認したんですけど、ペットは飼っていいんですよ。なので、役所が「ペットを処分しろ」なんてものすごい違法な対応なので、間違っているんですけども、そういうことがまかり通っています。ただ一回ペットがいる状態で、住まいを失ってしまうと、公的にも民

間の宿泊施設にもなかなか泊まれないので、それは大変だということで、犬猫部を立ち上げました。そうこうしているうちに、一緒に運動している稲葉剛さんが「ボブハウス」というペットと一緒に泊まれるシェルターを作ってくれたんですね。そこが今3室くらいあるんですけれども、そこも結構、常にいっぱい状態です。犬や猫を連れて、ホームレス状態になった人が泊って、そこから自分のアパートを借りて移転するまでの一定期間いられる場所なんです。住まいをなくした方が一定期間ペットと一緒に居られる場所ってというのは、全国どこを探してもありません。これは災害の時の避難所と同じなんですよね。ペット連れで入れないケースや、ペット連れで入れないから車で過ごしてエコノミークラス症候群で亡くなってしまったケースとか、やっぱり貧困の問題って災害の支援とつながることが多いので、そういうところでちゃんとペットのところも確保していかなくちゃいけないなってすごく感じました。

それから、直接ペット連れでホームレス状態になった人のところに駆けつけるだけじゃなくて、今派遣とかで働いている人が、人間の自分のご飯はお米とか保存できるものであるけれども、ペットフードがない、給料日まで買えないという人も多いです。そういう時には、ペットフードの銘柄を教えてもらって、ネット通販でペットフードを送るという活動もしています。そういうことを考えると、今ホームレス状態になる人は結構中間層の人なんですよね、ペットを飼えるぐらいにそこそこお金もあったという。本当に貧困だったら、ペットを飼えないじゃないですか。ペットの医療費も高いし、日々のフード代もあるし。現状を見ていると、コロナ以前はそこそこ収入があったからこそ、ペットを飼ってたんだなという人が多いです。中間層の方までも一気に生活が破壊されているのを感じます。

またペットの問題もそうですけれども、家に関する問題もあります。去年の4月から電話相談の相談員もしているなかで、今まで15年間で家に関する相談は「家賃が高い」「家がない」という相談しか受けたことがなかったんです。この1年半ではじめて「住宅ローンが払えない」という方の相談をたくさん受けるようになりました。結局これまで貧困問題の支援者のもとには、住宅ローンが組めるような安定層が相談に来ることはなかったんですよね。それが、住宅ローンを組めるような正社員であったり安定した生活をしていた方が、コロナで一気に収入を失ってローンを支払えなくなった。自営業の方も多いです。なので、今まで自分たちと関わっていた貧困層ではなくて、中間層の方もすごく増えています。そうなってくるとどうしても女性が多いんですよ。例えば「旦那の仕事が自営業で全然なくなって、自分も百貨店で派遣で働いていて、2人で働いてローンを返していたのに、2人とも収入が半分以下になっている」というような住宅ローンの相談を、女性から受けることも結構あります。なので、相談から今のリアルな問題が見え

てきます。去年の4月から相談を受けていて、当初は労働相談ばかりだったんですよ。休業手当とか仕事を休まされているとか。それがどんどん生活苦の相談になってきました。相談を寄せたみなさんに、今ある残金を聞いてるんですけども、去年の8月頃は平均値で200万円くらいあったんですね。でも今、今年の6月時点で20何万円くらいになっていて、貯金を切り崩してなんとか生活している方が増えているんですね。この間の6月の大阪の相談会では、とうとう「臓器を売りたい」と。だから臓器を売れる場所を知らないか、というタクシー運転手の方からの相談が来ました。お好み焼き屋さんから、時短協力金の振込が全然遅れているので、もうやっていけないから闇金を借りたいと、闇金を借りるにはどうしたらいいんだという相談もありました。段々相談のキーワードが、「臓器」や「闇金」とか、本当に深刻になってきました。ずっと定点観測をしているので、どれほどきつい状況になっているのかがよく分かりますね。

伊田：本当に今こそ政治のあり方というのが切迫して問われるというのがよく分かります。今すぐにでも、私たち一人ひとりができることを、ぜひ最後にお話しいただけますでしょうか。

雨宮：それぞれの立場が、みんな違う中で声をあげてもらえるというのが、すごく大きいと思っています。この間、今まで政治にあまり声をあげてこなかったアーティストの方とかが声をあげてますよね。だってもう収入源が全部断たれているような状況じゃないですか。ライブもイベントもできない。音楽も演劇も、いろんな業界の方も声をあげています。そして飲食の方も声をあげています。本当に自分たちの現場から声をあげてくださるので、それはすごく重要だなと思っています。

一方で、先ほど女性の自殺の話がありましたけれども、1人暮らしの女性より、同居人(家族)と暮らしている女性の自殺率の方が上がっているんですね。なので、それをよくよく見ていくと、4月ごろに内閣府から報告書が出たんですけども、結局男性の方はテレワークで通勤がなくなって快適になったという声が多いんですけども、女性は在宅によって家で仕事しなくちゃいけない、家事しなくちゃいけない、子どもは休校で育児もある、夏休みなど長期休みもありますよね。その上でさらに、高齢者施設でクラスターが発生して、介護施設が閉まったことによって、介護までしなくちゃいけないという。全部のケア労働が女性に覆いかぶさっているということが浮き彫りになってきました。そういうことと、同居人がいる女性の自殺率の方が上がっているというのはすごく関係があると思います。なので、例えば講演の始めに、自分は生活がそんなに困っていない  
対談「相談現場から見える女性の貧困、仕事、住まい」



いという中原さん（中原朝子座長）のお話ありましたけれども、生活が困っていないなくてもそういう状態にあるということは、本当に死に追いつめられるくらいの状況なんです。でも言ってもらわなくちゃ分からない。「在宅ワークで、家で子どもと一緒にいられていいじゃないか」と思われそうな立場だけど、「実はこんなにきついんだ」ということをあらゆる立場の人が言ってくれること、声を出してくれるっていうことがすごく重要だと思うので、ぜひ「自分は大したことはない」と思わずに、自分の大したことはないと思う辛さでも、言ってくれることで救われる人が絶対いると思います。

伊田：ありがとうございました。本当にそれぞれの立場で声をあげていくということの重要性を改めて思わざるをえません。今日の共通論題やその後のそれぞれの状況でも、今日のお話を生かしていきたいと思います。雨宮さん、どうもありがとうございました。

雨宮：ありがとうございます。

伊田：少し質問の時間を設けております。皆さんご質問などありますでしょうか。

雨宮：チャットに「貧困相談のところに、外国人の相談は来ていますか、外国人の相談の状況があれば、教えてください」という質問が出ています。

外国人の話ができなかったのが、ちょうどよかったです。ありがとうございます。先ほど、給付枠、寄付金から6,000万円以上給付しているというお話をしたと思うんですけど、その半数以上が外国人の方なんです。なんでかと言うと、日本国籍の場合生活保護を受けられますよね。でも外国人の場合、定住権と永住権がある人以外、原則、生活保護の対象にならないので、結局ものすごい困窮している状況でも、引っかかる制度、セーフティネットがないのです。特に厳しいのは、仮放免の人たちですね。また在留資格が短期で働けない人たちが結構います。特に仮放免の人は就労が禁止されているので、働いちゃいけないと言われながらも、公的福祉の対象にならないというめちゃくちゃな状況なので。

伊田：どうやって生きていったらいいんだろう。

雨宮：そうなんです。 「死ねっていいことですか」というのは何人もの外国人の方からも聞いて、団体ではそういう方たちにシェルターを提供したり少しずつ（給付金を）給

付したりしています。

そういう人たちがこれまでどうやってコロナ前まで生活していたかという、いろいろ聞くと、国籍ごとのコミュニティとかがあり、そこで在留資格があって働ける人が、働けない人の世話をするような形（をとりながら）で、コミュニティでやっていけたらしいです。今は在留資格があって働ける人が、コロナで仕事を失って、（コミュニティの相互扶助が）破綻してしまったという方がすごく多いです。埼玉の方にはクルド人の方が2,000人ぐらいいると言われていて、このコミュニティも本当に大変な状況になって。なので去年の11月には、いろんな支援団体が集まって、埼玉で外国人向けの相談会をしました。家族連れが多いので、（困窮していて）子どものおむつも無いというような状況、もちろん定期健診も受けさせられない、保険証も持っていない、お父さんが虫歯で激痛でのたうち回ってる、それでも病院にいけない、（なぜなら）現金もないし保険証もないからということ、無料低額診療を紹介したりとか、そういうやり方で何とかやっています。

年末年始とかゴールデンウィークとかに、四谷の教会で「大人食堂」という相談会をやってるんですが、そこの医療相談に来る人のほとんどが外国人で、ミャンマーの方やアフリカの方、イランの方、アジア系の方も多く、あらゆる国籍の人が来ています。本当に外国人支援に対して、今本当に無策で、とにかく自助と共助でやれという話ですが、そんなのは絶対に無理です。何とかちゃんとした外国人の緊急の支援策を作してほしいということを、ずっと緊急アクションで4回くらい政府交渉していて、ずっと言ってるんですけども、なかなか進まないです。その点は、使える法律やセーフティネットがないことに一番困っている状況です。

伊田：Q&Aにもう少し（質問が）来ております。時間が限られていますが、雨宮さん、いかがでしょうか。

雨宮：住まいを探す場合の女性単身とか差別の状況についての質問です。保証人がいない場合には結構厳しかったりします。もう一つ困窮者支援で厳しいのは、携帯が止まっている人が多いことです。携帯が止まっていると、不動産契約が難しいです。これはすごく困っているところです。なのでSOSメールくれる人の半分くらいが携帯止まっているんですね。フリーWi-Fiがある場所を見つけて、何とかメールくれる状況です。やっぱり携帯が止まっていると、仕事が見つからないし、せっかく生活保護を受けてアパート探そうとしても、契約の段階で厳しいという状況があります。「つくろい東京ファンド」では無料で携帯を2年間貸し出すということをやっています。今、役所の方ではもし過  
対談「相談現場から見える女性の貧困、仕事、住まい」

去に滞納があっても契約できるような、契約が簡単な携帯を紹介するというのをやっているそうです。

次に「寄付金の額」ですね。「緊急ささえあい基金」ということで、去年から始めて一応1億円以上集まっているという状況です。これは反貧困ネットワークが一般社団法人になって、そこで管理しているということだと思います。

最後の質問は「シングル中高年女性」について。多いですね、シングルの中高年女性。というか、シングルで高齢者ではない女性の場合、支援策が何もない状況なので、そこが本当に困るというか、若年女性もそうですけれども。20歳から64歳の女性がどれだけ困っても対応策、支援策がほぼほほないという状態です。女性って、結婚して正社員の夫がいるという前提で、いろんな社会保障が作られているので、それで割を食ってるかなという状況です。私自身も、40代単身女性なので、マンションの入居審査に落ちるんですね。それは単身女性でフリーランスだからですけれども。そういうところでまったく他人事ではないです。やっぱり非正規とか派遣というだけで、不動産の審査に落ちる。さっきシェアハウスの話をしましたけれども、雇用形態が不安定なことによって、より不安定な物件にしか住めないという。そういうことも起きていると思います。

伊田：ありがとうございます。日本の政策の根本的な、家父長制やジェンダーの問題を改めて深刻に受け止めざるを得ないなと思っております。それでは時間が来ましたので、トークセッションについてはこれで終わりたいと思います。雨宮さん、貴重なお話をありがとうございました。

雨宮：ありがとうございます。